

子どもとの関わりが困難な学生の実習指導のあり方

奥山朝子¹⁾ 山本捷子²⁾ 大高恵美³⁾

How The Instruction Should Be Given To The Student Nurse Who Find It Difficult To Associate With Child During The Pediatric Nursing Clinical Practice

Asako OKUYAMA Shoko YAMAMOTO Emi OOTAKA

要旨：臨床実習を効果的に進めるための指導のあり方を探るために、入院2日目で症状が強く、学生を受け入れられない状況にある3歳女児と、学生との関わりを学生の実習記録と教師の指導記録から分析した。学生は患児の拒否する態度に困惑し、状況を客観的に捉えることができずに実習意欲を低下させていた。

教師は、混乱している学生が客観的に現象を捉え、行動を評価できるよう心理的余裕を持たせることが必要であった。また、関わりの具体的方法を助言し、学生が実施してゆく過程をサポートし続けることで、学生が患児と関わる事ができた。

キーワード：関わり、実習指導、小児看護

Summary : How the association went on between a three-year-old girl who still showed strong symptoms on the second day after she was admitted to a hospital and the student nurse who was having practical training of nursing was analyzed from the student nurse's records of practice and the teacher's records of instruction.

The student nurse was embarrassed by the sick child who refused her, and could not have an objective understanding of the situation, thus losing motivation to have practical training. The teacher had to make the confused student nurse feel relaxed enough to understand what was taking place and evaluate the behaviors objectively. The teacher also advised the student nurse about specific approaches to the child and gave support to the student nurse throughout the processes of training. As a result, the student nurse was able to associate with the sick child.

Keywords : association, instruction in clinical practice of pediatric nursing, pediatric nursing

はじめに

本学では、小児看護学実習の目的を達成するために、「学生が子どもとよい関わりができる」を実習目標の一つにあげている。小児看護学実習において学生が患児とうまく関わる事ができるかどうかは実習目標の達成や、実習の充実感に影響する。しかし、近年の看護学生は同胞の少ない生育歴や地域の中で子どもと接する機会が少ないために、小児看護学実習では、病気で入院している年少幼児や急性期の患児との関わりが困難な場合が多い。

2年次第2クール目の実習において、急性期の患児を受け持った学生が、子どもから拒否され関

わりが困難な状況にあった学生の指導例を体験し、学生の実習記録と教師の指導記録を分析し、学生への実習指導のあり方を検討し、子どもとの関わりが困難な学生の実習指導のあり方について一つの学びを得たので報告する。

I. 研究方法

1. 対象

学生M：A短大2年次（後期）

既習の実習経験は基礎看護学実習3週間と母性看護学実習3週間（第1クール目）である。

小児看護学実習前の調査で、子どもとの関わりの経験は、親戚の子どもやボランティアとして、

乳児、幼児、学童と接しており、子どもに対しては、可愛いが遊んだり世話をするのは大変だという思いがあった、という。

受け持ち患児：3歳女児Aちゃんは、インフルエンザから気管支炎を併発し、発熱、湿性咳嗽、食欲もなく不機嫌で、治療として24時間持続点滴がされていた。

入院前は、保育所に通っており外遊びが大好きで、性格は素直で甘えん坊である。

家族は父、母、弟の4人で、母親が付き添っており、母親は妊娠10週で、やさしい人である。

学生はこの患児を入院2日目から4日間、受け持った。

2. 分析方法

1. 以下のことから分析する。

- A. 子どもの状態と学生の関わり
- B. 学生の思い、自己評価
- C. 教師の指導
- D. 教師の指導の分析・評価

3. 用語の操作的定義

関わり：自己の感情をコントロールし、信頼関係を形成する相手との相互作用。

II. 実習指導の経過・分析

1. 実習初日の状況と指導の分析

A. 子どもの状態と学生の関わり

患児にとって学生は初対面の人であり、症状も強かったために学生を受け入れられない状況にあった。しかし、学生は患児に「接近する」、「タッチング」など関わりを持とうと積極的に行った。学生に対して、患児の反応は「泣く」、「叩く」、「払いのける」といった、学生を拒否する態度が強かった。

B. 学生の思い、自己評価

学生は、患児に拒否されるとどうしたら良いのかわからなくなる。必要時以外は訪室しないほうが良いと思った。

C. 教師の指導

学生は患児の行動と、患児に対する自分の行動の評価ができず困惑した状態であり、全く余裕を失ってしまっていた、と教師は捉えた。その理由

として、学生は患児が3歳であること、入院2日目であることを考えずに患児に近づいている、また患児の様子を見ながら患児の気持ちや行動に合わせていくという小児看護者としての配慮が欠けていたため、と教師は判断した。

教師は、学生の「どう接したらよいかわからない」という気持ちよりも「必要時以外患児の所を訪室しない」という行動を問題視し、これでは患児と学生はますます関わりがとれないだろうと判断した。そして、教師は学生に子どもの特性を理解させて接触の時間をもてるように、患児の状況について助言したり、カンファレンスでも強調した。その日の実習記録では、学生は困惑した気持ちを軽減できなかった。

D. 教師の指導の分析・評価

余裕のない困惑した状況にある学生に、教師は学生の気持ちを受容できておらず、学生の行動を問題視してしまっている。このときの教師の学生への助言は、トマス・ゴードン¹⁾のいう非受容言葉の「講釈・理詰めの説得」に当たり、効果を得ていない。

2. 実習2日目の状況と指導の分析

A. 子どもの状態と学生の関わり

学生は一人でいる患児と1対1で、コミュニケーションがとれたが、母親が戻ってくると患児は学生に拒否的だった。

B. 学生の思い、自己評価

学生は、母親がいるときでも患児とコミュニケーションを成立させないとケアが円滑に進まないで、母親がいても話ができるようにならない、と思った。

C. 教員の助言

教師は、学生が患児と1対1で話のできた事実を認め、学生に自信を持たせた。また、他の人よりも親の存在の方が良いという年少幼児の特性を理解させようとしたが、結果は捉えられていない。しかし、人見知りをする子どもとの関わりの具体的方法として「関わりのステップ」として、(a)子どもは自分の視野の中にある者を見慣れると不安を感じない。(b)子どもと関わる人と物との「三項関係」で関わるとよい。(c)ナースの関わりをモデルとする、を助言した。その結果、三項

関係の仲介物を作ろうという学生の意欲を引き出した。

3. 実習3日目の状況と指導の分析

A. 子どもの状態と学生の関わり

学生は、子どもの好きなポケモンの絵を厚紙に描き、それにリボンをつけてメダル風（以下、「ポケモンメダル」とする）にして患児のベットサイドに持って行った。しかし、患児はそれを受け取ったがすぐに放り出してしまった。

学生は自分の期待に反して患児にポケモンメダルが受け入れられなかったために落胆し、再度混乱した。しかし、学生は患児に直接関わらなかったが、患児の視野の中に自分がいるように病室内にいた。

B. 学生の思い、自己評価

患児はメダルをいったん受け取ってくれたのに、なぜ放り出してしまうのかよくわからなかった。

学生は、自分が同室の子どもと話をしているとき、患児はジッと自分を見ている時がある、それに気づいて患児の方を見るが、患児は視線をそらしてしまう。自分はどう接したらよいのか迷ってしまう。

C. 教師の指導

教師は、他の学生に学生が捉えることのできない患児の反応や学生と患児の関わりを観察しておくよう依頼した。

4. 実習4日目の状況と指導の分析

A. 子どもの状態と学生の関わり

学生は不安ながらも病室に行くが、患児はまだ学生に拒否的であったため、母親とだけ話をして退室した。

学生が退室してから、母親は自分の子どもがいつまでも学生を拒否し続ける態度が悪い、と叱り、子どもの玩具を取り上げたりした。母親に叱られ泣いている患児の様子を学生は廊下から見ていた。

また、学生は自分が作って渡したポケモンメダルが子どものベット上に見つけられず、がっかりしていたが、「点滴スタンドに下げられている」と他の学生が教えてくれた。ポケモンメダルには患児自身が裏側にシールをたくさん貼られていた。これを聞いて学生は安心した表情が見られたが、元気はなかった。

午後も学生は患児の病室に行けずにいた。

教師が学生に、患児の退院が決まった事を知らせると、学生は患児の所に一人で行き、会話し、脈拍測定をした。

B. 学生の思い、自己評価

患児は、毎日自分が病室に来ることや、病気で入院していなければならない事でストレスが蓄積している。

母親の行動に対しては、人を叩こうとする我が子を叱らないではいられなかった。母親が子どもに道徳性を身につけさせようとしてとった行動である。

午後、一人で患児の所に行き、患児と話ができたことに対しては、母親がいてもいなくても患児が泣かなくなったのでよかった。

C. 教師の指導

ポケモンメダルに関しては、教師も学生と一緒に喜んだが、学生がその状況を確認のために患児の所に行けずにいる葛藤状態にあると、教師は判断し、学生の様子を見ていた。

教師は学生に患児の退院が決まったことを告げ、学生の行動を見守っていたが、学生が「患児の病室に行ってみる」と言うので途中まで同行した。病室の近くまで行くと、学生は「一人で行く」と言い、廊下から学生と患児の様子を見守っていた。

D. 教師の指導の分析・評価

患児の情報を正確に把握できない状況にある学生にとって、他の学生からの情報や助言は、教師との縦の関係からくるものとは違い、受け入れやすく、有効であったことを意味している。

午後の学生は、患児を観察しなければならない看護者としての役割と、また患児に泣かれるかもしれないという不安と、自分が原因で患児が母親に叱られ、患児がかわいそうだ、という子どもへの母性的な意識が混在して、どう行動したらよいかわからないブロッキング状態²⁾にあったといえる。この状況で教師は学生に患児の退院が決まったことだけを学生に伝えて、学生の状況を見守っている。

5. 実習終了後の面接

教師は、実習終了後の翌週に学生と面接をした。

B. 学生の思い、自己評価

学生に患児と関わっていくときの気持ちを聞くと「病院までは、よし、今日こそがんばろうという気持ちだった。でも、病室に行くと子どもにまた拒否されどうしようかと思ってしまい、積極的になれなかった。」と話し、子どもの反応に「もう、こいつ!」と、患児を拒否的に見てしまったと言う。患児の前に立つと不安になり顔もこわばっていた。訪室の目的が見えなくなっていた。と、自己を客観視できていた。また、子どもとの関わりでは、関わる自分の気持ちが相手に伝わって患児を緊張させたのではないかと状況分析ができていた。

D. 教師の指導の分析・評価

実習終了後の面接では、学生に実習中の自己の感情や行動を冷静に振り返り替えさせ、自己の変化に気づかせることができた。

Ⅲ. 教師の指導の考察

教師は子どもとの関わりが困難な学生に対し、学生が自分と子どもとの関係を客観的に捉えているか、また学生自身子どもの反応の意味や理由が理解でき、自己の客観視ができているかどうかを、まず第一に判断する事が必要で、そのためには学生も教師も心理的余裕を持つ事が必要である。

実習2日目、教師は学生に、子どもが見知らぬ人を受け入れていくステップをわかって、関わる具体的方法を助言したことは、学生に受け止められ、学生はそれをポケモンメダルとして表してきた。しかし、学生はすぐに効果を期待したため再び混乱状態に陥った。結果的には学生が作ってきた物は子どもに受け入れられたが、3歳という年少幼児の特性を考える必要がある、ということも補足すべきであった。

実習4日目、子どもの状況を客観的に把握できない学生に、学生と教師という縦の関係にある者より、横の関係にある他の学生からの情報提供は、学生が緊張することなく冷静に受け止められており、有効であるといえる。

教師にとって大切なのは、状況にあわせた指導である。良きリーダーシップには、①教師がコミュニケーションを主に、「指導する (Telling) 形態」、②教師が積極的に指導しながらも学生を参加させていく「説得する (Selling) 形態」、③教師が時々学生に必要な情報を提供したり、重要事

項を強調したりする「参加する (Participating) 形態」、④教師は学生に状況をコントロールするのを任せて、教師は参加者としてあまりコントロールしない「委任する (Delegating) 形態」がある (Van Hoozer et al, 1987) ³⁾。

実習指導のプロセスをたどってみると、実習初日は、教師と学生との人間関係が希薄であること、学生が子どもの特性を理解できないこと、学生自身の成熟度も低いにもかかわらず、教師はコミュニケーションを主にした「指導する (telling) 形態」の場面が多い。実習2, 3日目は教師が学生に具体的方法を助言し、学生が三項関係に関わろうとする、学生の意欲を引き出して、学生を参加させていく「説得する (Selling) 形態」である。

実習4日目の学生は、グループメンバーの情報に助けられながら患児と関わりを持つと最後まで努力した。これは、「参加する (Participating) 形態」による変化である。

子どもと学生との関係が成立しつつあったこと、学生も自己の客観視ができる段階にあったために関わりが成立した。教師の学生指導の形態の変化にともなって学生の行動も変容してきている事がわかる。

おわりに

短期入院の小児に関わる場合、時間的余裕がないため、学生の困惑に対応したその時々教師の関わりが大切である。本事例を分析することによって、学生の不安を軽減しながら、学生自身が自己の行動を客観的に振り返り、小児の言動を受容し、次のステップへと進んでゆけるよう、教師は言葉を添えながら心理的にサポートする指導的関わりが重要であることがわかった。

また、学生が自己を客観的に振り返るには、心理的余裕を持たせることが不可欠であるので、教師も学生以上に心理的にゆとりを持つよう努力しなければならないことを痛感した。

引用文献

- 1) トマス・ゴードン：T.E.T. 教師学, 51, 小学館, 1994.
- 2) ピクトリア・スクールクラフト：看護を教える人への14章, 34~36, 医学書院, 1998.
- 3) 阿部俊子：臨床実習, 看護教育, 37 (10), 828~831, 医学書院, 1996.

参考文献

- 1) 藤岡完治：感性を育てる看護教育とニューカウンセリング，医学書院，1995.
- 2) 林 竹二：教育の根底にあるもの，48～51，径書房，1994.
- 3) 松田光信他：悲嘆状況にある患者のケア，看護研究，32（1），81，医学書院，1999.
- 4) 佐々木栄子：学生を理解する，看護教育，40（3），185，医学書院，1999.
- 5) 鈴木正幸：看護のための教育学，129～139，メジカルフレンド社，1998.
- 6) 山田雅子他：看護教育における教師と学生の関わり，東京医科大学看護専門学校紀要，第9巻，第1号，1992.